

三商レポート

第六十七話 「レクイエム」

相続プラザ 花小金井 (株)三商 内藤 雄

小平市花小金井南町1-14-24 電話 042-67-2103

E-mail sansyo@trust.ocn.ne.jp <http://www.souzokusoudan.net>

年末になり、喪中はがきが次々に届く。その1枚に「エッ！」と声を上げてしまった。「9月に母が73歳で10月に父が79歳で相次いで永眠致しました。生前と変わらず2人で穏やかに過していると思います。」Aさんの息子さんからだった。

Aさん夫婦と息子さんに初めてお会いしたのは、6年前だった。

Aさんが経営する会社が債務者となり、Aさんと奥様が保証人となっている金融機関からの借入があった。銀行は不良債権と認定して、保証協会と整理回収機構(RCC)に債権を譲渡した。保証協会とRCCは、Aさんが所有するビル3棟を全て処分し返済するよう強く求めてきていた。

Aさんは、10代の頃にバッグ1つを持って上京した。苦労を重ね、仕事を変えながらも一生懸命に働き、やがて工務店を起こした。真面目な人柄と仕事振りが認められて成功し、ビルを1棟持つようになった。バブル期になると、銀行はAさんに土地の情報を次々に持ってきた。そして、金までも用意した。Aさんは、3棟のビルオーナーになっていた。その1棟の最上階に住み、賃貸収入もあり、老後は悠々自適のはずだった。

ところが、バブルが崩壊し、地価が下落し、統合したメガバンクからの借入が担保割れとなった。メガバンクは息子さんを保証人にするよう求めてきたがAさんは断った。そこで、メガバンクの債権が不良債権と確定され、債権は保証協会とRCCに譲渡された。先順位の都市銀行と信用金庫も、メガバンクに追随し譲渡した。保証協会とRCCの回収態度は、時節柄厳しいものだった。

結局、2棟を一括で売却することになった。私も決済の場への同席を許された。銀行の2階の広い会議室で、「売買」と「返済」の手続は淡々と進んだ。まるで通夜の席のような重苦しい静けさだった。ダークスーツ姿の多くの関係者を前に、Aさんと保証人の奥様はまるで罪人のように背を丸め首は垂れていた。無言で書類に署名し実印を押すAさんの無念な思いが背中から伝わってきた。手続が終わり帰り際にAさんが言った。「内藤さん、私は後ろめたいことは何もしていません。ただ銀行の言う通りにしてきただけなのです。」

それでもまだ多額の債務が残っていた。保証協会とRCCは、残債の返済を求め残る1棟の売却も強く求めてきた。病気を持つAさんは、残った住みなれた自宅で最期を迎えたいと願っていた。追いつめられたAさんは、「私は絶対にあきらめません。きっとなんとかなるはずですよ。」と打ち合わせのつど言っていた。Aさんは、心の支えにしているという中村天風さんの話をよくしてくれた。「ぜひ読んでください」と中村天風著「真人生の探求」をプレゼントしてくれた。また、「毎年高尾山を歩いて登っている」と楽しそうに話してくれた。

Aさんの強い気持ちが、息子さんの心に火をつけた。息子さんが両親の住むビルを買う決心をした。会社勤めで独身の息子さんは、幸い親の借金の保証人にはなっていなかった。息子さんは、会社を休んで何件もの金融機関の窓口を訪れ融資の申し込みをした。しかし、ことごとく断られ続けた。ノンバンクもダメだった。あきらめかけた頃、自宅に第二地銀の若い営業マンがたまたま営業の挨拶に来た。事情を話したら、この行員が動いてくれた。幸運なことに、都内にミニバブルが始まっていた。そして、この第二地銀が資金を出してもいいとやってきた。しかし、その価格では残債にははるかに足りなかった。保証協会などの攻防の末、金額が折り合い、息子さんが借入金でビルを買取ることができた。そして、Aさん夫婦はこのビルの最上階に今まで通りに住むことができるようになった。「絶対にあきらめない」Aさんの強い気持ちが実を結んだ。

それでもまだ、保証協会の債務が数千万円残った。保証協会は、決して債権放棄をしない。「でも、自己破産などしなくて大丈夫ですよ。年金の中から少しずつ払っていきましょう。」とAさん夫婦に。息子さんには、「もし相続が開始したら、相続放棄しましょうね。」とアドバイスしていた。全財産を失い、年金生活のAさん夫婦は、年金の中から保証協会に返済することになった。保証協会との毎月の支払額の約束では、完済までに100年以上かかる計算になるが。その後、奥様と話す機会があった。「最近、主人は宝くじを買っています」「どうしてですか？」「手放したビルを買戻すつもりなのです」奥様と笑ってしまった。しかし、Aさんの無念な思いを改めて感じた。

息子さんから様子を聞かせていただいた。「母はガンでした。母の49日を済ませ、父は自宅で1人で食事をしながら亡くなりました。」相続放棄の手続も終わったという。Aさんに出会ったことをきっかけに、中村天風さんの本を読むようになった。毎年正月に高尾山を歩いて登ることも恒例となった。2010年の正月は、Aさんご夫婦を思いながら、高尾山薬王院と山頂をめざし歩いて往復する。「絶対にあきらめない。なんとかなるはずですよ。」の言葉を口にしながら。

(2009年12月30日)

～「三商レポート」をお読みいただきありがとうございます。
新しい年が皆様にとって幸せな年になりますように。～